

早稲田商学第 403 号
2 0 0 5 年 3 月

消 息

立脇和夫先生のご退職にあたって

立脇和夫先生がいよいよこの3月をもってご定年退職を迎えられます。1992年に早稲田大学商学部教授になられてから今日に至るまで12年間と比較的短い期間ではありましたが、先生は商学部並びに商学研究科において金融関連科目で重要な役割を担ってこられました。大学の定めによるものとはいえ、その先生がお去りになることに大いなる寂しさを禁じえません。これからも先生が活躍なさり続けることは間違いないことですが、この大きな区切りにあたり立脇先生のご足跡・ご功績などを振り返ってみたいと思います。

立脇先生は1935年1月に島根県でお生まれになり、1959年に神戸大学経営学部をご卒業になっておられます。

先生の職歴は大変多彩かつ華麗なものであります。職業人生の出発点となったのは日本銀行で、本店調査局で海外経済調査を、また国債局では外債発行事務を担当されました。このほか神戸・秋田・松江各支店では日銀券発行業務、為替管理業務、地方経済調査なども担当されました。この期間中特筆すべきは1961年度フルブライト奨学金を受けられたことです。まだ日本社会全体が貧しさから脱却していないこの時期にあって、同奨学金はアメリカでの勉学を志す若き日本人にとって憧れの的でした。従って試験の競争率も極めて高く、同奨学金受領者の中から後に幾多の俊英が輩出されたことは皆様良くご存知のことと思われます。先生はこの奨学金を利用して、同年9月から翌1962年8月までワシントン大学（シアトル）大学院ビジネススクールへ留学され、主に国際金融の勉強に勤しまれました。

この留学体験がどの程度影響しているのかは図りかねますが、先生は1973年5月に日本銀行を退職され、米国コンチネンタル・イリノイ・ナショナル・バンクに転職されます。現在でこそ外国の銀行に勤務する日本人は珍しくありませんが、これは当時としては極めて異例で、大きな意気込みを持たれた上でのことだと推察しております。同行で

はシカゴの本店で研修を受けられたのち、東京支店で融資（インパクトローン）及び市場調査の業務を担当され、最終的には同支店副支店長に就任されております。

その後先生はご自身の人生航路において大きな転進をとげられます。それまでとは大きく職場環境が異なる、教育・研究の世界へと足を踏み入れられたのです。まず、1983年に長崎大学経済学部へ赴任され、1987年には教授に就任されております。その後1988年就任の静岡県立大学国際関係学部教授を経て、1992年4月に早稲田大学商学部の教授に就任、今日に至っております。

本学において戴いて以来、学部では「商業学B」・「金融論」・「英語経済学」・「ファイナンス論」・「国際通貨制度論」・「国際金融市場論」といった講義科目の他に「専門科目演習」を、大学院では「国際通貨制度研究」・「国際金融市場研究」といった講義科目の他に「修士課程及び博士後期課程研究指導」をそれぞれご担当になっておられました。また1998年3月より1999年4月まで、コロンビア大学経営大学院客員研究員として米国に滞在されております。

本学にいらしてからの先生の教育面での功績は何といってもゼミナールの運営で、多くの有為な人材を輩出されておられます。先生は常に金融という現象の現実と理論双方に常に目を配るよう学生を指導されておられました。また卒業論文作成に当っては中間発表の際の先生のコメントと質問が極めて的を得たものであり、それが繰り返されているうちに自然と論文が完成へと至るという、正に「名伯楽」そのものの指導であったと聞いております。

また、大学院のゼミには中国や韓国、台湾からの留学生が非常に多く在籍していたのも印象的です。彼らに対しては専門の研究のみならず、日本語能力向上にも大変熱心に取り組まれておられました。

また、理論同様現実・制度を重んじられる先生は、日本銀行貨幣博物館、東京証券取引所、金融先物取引所などへゼミ生をしばしば引率されていらしたようです。その他院生を中心に、鎌倉や江ノ島への散策へと誘われ、その後ほど近いご自宅に招かれて、歓談されたとも聞いております。

また、学部・大学院の各種委員会の他、「大隈学術褒賞選考委員会」及び「高田早苗記念研究図書館運営委員会」の委員として大学全体の運営にも貢献されております。

先生のご研究も、職歴同様極めて広範囲で、浅学の執筆者である私が全体をカバーす

ることはとても不可能ですが、できる限りのところでフォローさせていただきます。先生のご研究は大きく分けて3つの領域から構成されているものと考えられます。まず、元セントラルバンカーとしての経験を背景にした「中央銀行」に関する一連の研究（それぞれの領域に関する論文に関しては主要なものを巻末に掲載しますので、そちらをご参照下さい）で、この領域の著作としては『改正日銀法』（東洋経済新報社 1997年）が代表的だと思われます。50数年振りの日銀法改正に合わせて出版されたこともあり日銀関係者からも好意をもって迎えられました。次に、やはり在日外国銀行勤務経験を背景にしたと思われますが、「在日外国銀行の歴史」と「その存在が日本経済に対してどのようなインパクトを持っていたのか」という意識に基づく一連の研究で、学術書としては『在日外国銀行百年史』（日本経済評論社 2002年）が、教養的書籍としては『明治政府と英国東洋銀行』（中公新書 1992年）がそれぞれ代表的なものだと思われます。この分野でのご研究は、おそらく先生が日本の頂点に立つものと誰しも認めるところで、事実先生の母校神戸大学は1989年に「在日外国銀行史の研究」という論文を対象に、経済学博士の学位を授与されています。最後は、学部・大学院で講義・演習を担当されている国際金融の知識をフルに活用された「欧州通貨統合」に関する一連の研究で、沢山の論文をお書きになっておられますが、広く世に問うたものとしては『欧州中央銀行の金融政策』（東洋経済新報社 2002年）があげられます。これは著書ではなく静岡県立大学教授の小谷野俊夫氏との共訳書（原題は“The Monetary Policy of the ECB”で、欧州中央銀行〈ECB〉が纏めたもの）ですが、欧州中央銀行のスタンスを広いパースペクティブで紹介する内容となっており、研究者のみならず欧州に関心を持つ多くの人々に対するガイドブック的役割を見事に果たすもので、学術的にはもちろん、啓蒙的な意義も極めて高いものだと考えております。

これまで紹介してきたように、そして巻末の論文リストを見ていただければ明らかのように、先生のご研究はダイナミックかつ水準の高いものばかりです。今回の執筆に当たってある大学院生から、「教務補助として時折、先生の資料収集や資料整理のお手伝いをする機会もありましたが、資料をひとつひとつ丹念に調べ上げる先生の学問・研究に対する姿勢には印象深いものがありました。また、常々、理論のみならず、現実の経済を見つめることを忘れないようにとのアドバイスは心に残っています。特に、金融に関しては制度が複雑かつ変化が激しいものなので、最新の制度を理解する必要性を説い

ておられました」というエピソードを聞くことができました。こうした真摯な姿勢が先生の素晴らしい研究成果として開花したのだと考えるのは私一人ではないでしょう。こうした流れの中で、学術団体でのご活躍振事も目覚ましいものがあります。私も同席させて頂いている日本金融学会では何度も研究報告をされたうえ、理事として学会運営の重責を担っておられます。また、日本国際経済学会、証券経済学会、金融構造研究会などでもご活躍なさっております。

また、学外では日本郵政公社金融懇話会委員、藤沢市特別職職員報酬等審議会会長なども勤められており、社会的にも大きな役割を果たしておられます。

ご退職後については現在のところ未定だとのことでしたが、将来的な夢として「家族で英語塾を開くかもしれない」と語っておられます。先生はもとよりご家族揃って英語にご堪能なだけに、現実のものとなることを楽しみにしております。

いくら紡いでも、拙い私の文章では惜別の気持ちを尽くせそうにありません。先生におかれましてはこれからますますお元気で、私たちのことを暖かく見守っていただければということを切望して、区切りといたします。

立脇和夫先生 主な著作と論文

○（なお、論文に関しては膨大な数に上るため、勝手ながら21世紀に公表されたものに限定させていただきます。ここに掲載された論文だけでも立脇先生のご研究における「三本柱」の存在を窺い知ることができると思います。また、本文中で紹介させていただいたご著書については重複掲載を避けていることをお断りしておきます。）

〈著書〉

- 単著 『アメリカの金融制度』（教育社 1979年）
- 単著 『金融大革命』（東洋経済新報社 1982年）
- 単著 “Banking and Finance in Japan” （Routledge, London, 1991）
- 共編著 『金融革命と銀行経営』（法律文化社 1986年）
- 共編著 『国際社会と国際協力』（北樹出版 1990年）
- 共訳 『アメリカの金融自由化』〈カーギル・ガルシア共著〉（東洋経済新報社 1983年）

- 共訳** 『銀行破綻から緊急救済へ』〈I.H. スプレーグ著〉（東洋経済新報社 1988年）
- 共訳** 『アメリカの金融政策と金融市場』〈A. ミューレンダイク著〉（東洋経済新報社 2000年）

〈論文〉

- 「平和条約発効後の在日外国銀行（下）」（『早稲田商学』 389号 早稲田大学商学同攻会 2001年）
- 「欧州中央銀行制度の金融政策運営，独立性及びアカウンタビリティ」（『産業経営』 31号 早稲田大学産業経営研究所 2001年）
- 「欧州通貨統合の実現とギリシャの参加」（『早稲田商学』 392号 早稲田大学商学同攻会 2001年）
- 「外国証券会社の日本進出の史的分析」（『早稲田商学』 393号 早稲田大学商学同攻会 2002年）
- 「わが国中央銀行法の系譜」（『商経論叢』 383号 神奈川大学 2003年）
- 「わが国の発券銀行と中央銀行」（『早稲田商学』 397号 早稲田大学商学同攻会 2003年）

○その他「学会報告」・「分担執筆」・「書評」などの形で先生の研究成果は数多く公表されております。

藤 原 洋 二